

「胎児の視覚的認知が妊産褥婦の児受入に及ぼす影響」

分担研究：母子同室と母性の健全育成に関する研究

山口大学医学部産婦人科

研究協力者：加藤 紘 佐世正勝

【要約】

妊娠中に胎児を視覚的に認知することが妊産褥婦の児の受入れ、特に育児不安に対して影響を及ぼすかを検討した。正常な出産と産褥が見込まれる初妊婦16例を対象とした。これらを、通常の胎児超音波スクリーニングを行った群（コントロール群：9例）と胎児超音波スクリーニング時に積極的に胎児を形態的に認知させた群（超音波学習群：7例）に分け、妊娠後期、産褥1週目、産褥1カ月目に、育児回避、育児不安、STAIのアンケートを行い、両群間の比較を行った。超音波学習群で育児回避に関して有意な低下が認められ（妊娠後期： $p < 0.01$ 、産褥1週目： $p < 0.05$ ）、また育児不安に関して低い傾向が認められた。妊娠中からの児の視覚的認知は、育児回避を低下させ、分娩後の育児不安を軽減させる可能性があることが示唆された。

【見出し語】

胎児超音波検査、胎児の視覚的認知、育児不安

【はじめに】

超音波診断装置の普及により妊娠中の胎児超音波検査はルーチン化している。胎児超音波検査中にディスプレイに目をこらす妊婦も多い。通常、妊婦は胎動を通じて胎児を認知しているが、胎動という感覚的な児の認知に加え、妊娠中に胎児を視覚的に認知することが妊産褥婦の児の受入れ、特に育児不安に対して影響を及ぼすかを検討した。

【研究方法】

1. 対象

1997年8月～1998年2月の間に、山口大学医学部附属病院で妊娠、分娩、産褥管理を行った初妊婦のうち産科的異常がなく、正常な出産と産褥が見込まれる16例を対象とし、インフォームド・コンセントを得て行った。

2. 方法

通常の胎児超音波スクリーニングを行った群（コントロール群：7例）と胎児超音波スクリーニング時に積極的に胎児を形態的（顔、手足、性生殖器等）（写真）に認知させた群（超音波学習群：7例）の間で検討を行った。

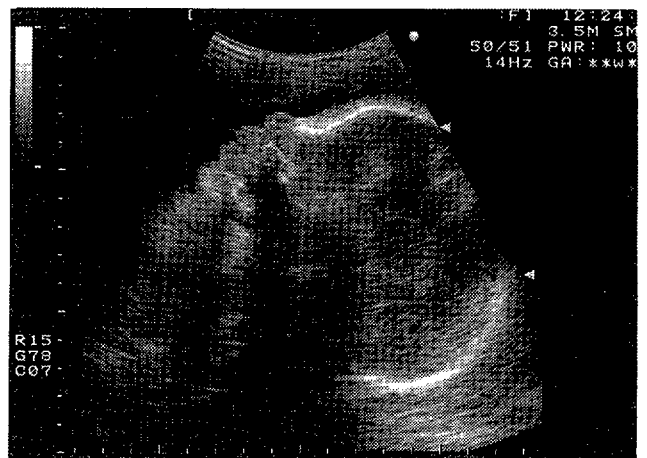


写真 胎児頭部矢状断面（横顔）

育児不安を検討するために、花沢の育児動機判定尺度1)を参考に別に作成した育児回避判定尺度（表1）、及び独自に作成した育児不安判定尺度（表2）による質問調査を行った。また精神的不安を検討するため、State-Trait-Anxiety-Intentory (STAI) 2)

による質問調査を、妊娠後期、産褥5-7日目、産褥1カ月目の3回行った。各質問項目について、あらかじめ決められた点数によって得点を算出し、有意差検定（マンホイットニー検定）を行い、危険率5%未満の場合を有意と判定した。データはすべてmean±S.D.で示した。

表1 育児回避に関する質問

	全くしたくない	したくない	どちらでもない	したい	非常にしたい
見ていたい	()	()	()	()	()
そばにいたい	()	()	()	()	()
そい褒めたい	()	()	()	()	()
さわりたい	()	()	()	()	()
ほほずりしたい	()	()	()	()	()
くちずけしたい	()	()	()	()	()
手をにぎりた	()	()	()	()	()
あやしたい	()	()	()	()	()
話しかけたい	()	()	()	()	()
わらわせた	()	()	()	()	()
乳をあげたい	()	()	()	()	()
だっこしたい	()	()	()	()	()

表2 育児不安に関する質問

	そのとうり	少しそのとうり	そうでもない	全くちがう
育児に自信がない	()	()	()	()
育児は負担である	()	()	()	()
育児は苦痛である	()	()	()	()
育児はたのしみとはいえない	()	()	()	()
まわりのひとに助けてほしい	()	()	()	()
抱いてあやすことができない	()	()	()	()
上手に授乳することができない	()	()	()	()
授乳の間隔がよくわからない	()	()	()	()
おむつ交換が上手にできない	()	()	()	()
着せ替えが上手にできない	()	()	()	()
沐浴が上手にできない	()	()	()	()
洗濯が上手にできない	()	()	()	()
子と気持ちがよくかわわない	()	()	()	()
子と対話がうまくできない	()	()	()	()
むずかっている時、どうしてかわからない	()	()	()	()
泣いたとき、どうしてかわからない	()	()	()	()
笑った時、どうしてかわからない	()	()	()	()

【結果】

超音波学習群の平均年齢は28.4歳、コントロール群の平均年齢は29.2歳で、両群に差はなかった。

1. 育児回避、育児不安(表3)

育児回避については、妊娠後期(p<0.01)及び産褥1週(p<0.05)において超音波学習群は、コントロール群に比較して有意に低い値を示した。産褥1カ月では低い傾向にはあったが、その差は有意ではなかった(p>0.05)。

育児不安については、産褥1週および産褥1カ月に

において、超音波学習群で低い傾向があったが、コントロール群と有意差を認めなかった。

表3 育児回避、育児不安に対する妊娠中超音波学習の効果

	超音波学習群 (n=7)	コントロール群 (n=9)
育児回避		
妊娠後期	12.14±0.38*	14.78±2.22
産褥1週	12.14±0.38**	16.33±4.53
産褥1カ月	13.57±2.82	18.67±6.83
育児不安		
産褥1週	30.0±7.6	37.6±8.2
産褥1カ月	27.9±6.6	33.0±10.6

*: p<0.01, **: p<0.05

2. STAI(表4)

状態不安については、妊娠後期、産褥1週および産褥1カ月のいずれも超音波学習群で低い傾向があったが、コントロール群と有意差は認めなかった。両群において、妊娠後期、産褥1週および産褥1カ月にともなう変化は認めなかった。

特性不安については、超音波学習群とコントロール群間に有意の差を認めなかった。また、両群において、妊娠後期、産褥1週および産褥1カ月にともなう変化は認めなかった。

表4 STAI 評価に対する妊娠中超音波学習の効果

	超音波学習群 (n=7)	コントロール群 (n=9)
状態不安		
妊娠後期	36.1±13.1	43.7±12.3
産褥1週	36.1±12.6	37.3±6.9
産褥1カ月	32.6±7.6	39.3±11.9
特性不安		
妊娠後期	40.1±12.2	38.2±14.0
産褥1週	42.1±18.3	38.4±12.3
産褥1カ月	35.4±9.2	39.8±14.0

【考察】

妊娠中に妊婦はさまざまな不安を持っている3)。自分自身の身体に関することと共に、胎児及び出生後の育児に対しての不安が強い傾向にある。特に初産婦は、妊娠、出産、育児に未経験であり、胎動を通して

児を感覚的に認知しているものの、具体的なイメージが乏しく、児に対する漠然とした認識が育児不安につながっているものと思われる。

今回、超音波画像を通して妊娠中に児を視覚的に認識させることにより、母親の育児回避の低下が認められた。有意差はなかったが、同様の傾向が産褥1カ月の時点まで持続していた。これは、視覚的に児を認識することが育児に対する前向き気持ちを起こさせる可能性を示すものと考えられる。またこの傾向は分娩後に児との直接的な接触が持たれ始めても持続しており、胎児超音波検査が児の発育や異常の有無の評価だけでなく、母子の早期接触という利点を持つことを示している。また、育児不安についても、有意差はなかったものの妊娠中より胎児を視覚的に認知させた群で低い傾向があり、妊娠中から生まれてくる児を視覚的に認知することが、母親に育児に対する具体的なイメージを起こさせ、育児不安の軽減につながっている可能性がある。しかし、育児不安を解消するまでには至っておらず、胎児の視覚的認識により誘起された児に対する関心を現実的な対応につなげていくためには、出産前の母親学級、出産後の育児指導を始めとする介入が必要と考えられた。

特性不安に関して、いずれの時期においても両群で差を認めておらず、今回検討を行った両群は不安特性には差はなかった。また状態不安に関しては、児を視覚的に認知させた群で低い傾向があったが、いずれの時期においても両群で差を認めておらず、妊産褥婦が妊娠、出産、育児に対して児以外にもさまざまな不安を持っていることを反映していると考えられた。

母親に対して妊娠中に超音波画像を通して児を視覚的に認識させることは、母子の早期接触という意味で妊産褥婦の児の受入に対する態度の改善、育児不安の軽減に役立つ可能性があると思われる。今回の検討では、症例が少なく不安特性の違いによる検討は行えなかったが、精神的なハイリスク群と考えられる不安特性の高いグループで超音波学習効果はあるのか、また今回は有意差が認められなかったが、育児不安、状態不安に対する超音波学習効果についても、今後、症例を増やして検討を行っていく必要がある。

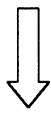
【文献】

- 1) 花沢成一：母性意識の発達。母性心理学（医学書院，東京），p9,1992.
- 2) Spielberger CD, Gorsuch RL, Lushene RE:

Manual for the State-Trait Anxiety Inventory (Self-Evaluation Questionnaire). Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press, 1970.
3) 西島正博、吉原 一、柳奈津子：妊産婦の妊娠中期からの不安の変化とその要因。厚生省心身障害研究平成8年度報告書，p47,1997.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】

妊娠中に胎児を視覚的に認知することが妊産褥婦の児の受入れ、特に育児不安に対して影響を及ぼすかを検討した。正常な出産と産褥が見込まれる初妊婦 16 を対象とした。これらを、通常の胎児超音波スクリーニングを行った群(コントロール群:9 例)と胎児超音波スクリーニング時に積極的に胎児を形態的に認知させた群(超音波学習群:7 例)に分け、妊娠後期、産褥 1 週目、産褥 1 カ月目に、育児回避、育児不安、STAI のアンケートを行い、両群間の比較を行った。超音波学習群で育児回避に関して有意な低下が認められ(妊娠後期: $p<0.01$ 、産褥 1 週目: $p<0.05$)、また育児不安に関して低い傾向が認められた。妊娠中からの児の視覚的認知は、育児回避を低下させ、分娩後の育児不安を軽減させる可能性があることが示唆された。